

**2月3日ゼミは開催します****5世紀の技術革新：渡来人が倭に伝えたもの**

—2月3日ゼミ要旨—永井 輝雄会員記—

5世紀頃、朝鮮半島各地から、技術や知識を持った人々が、わが国にやって来た。今の言葉でいうと渡来人である。戦争が続く祖国を逃れて自らの意志でやって来た人もいたかもしれないが、先進技術・知識を必要とした倭国の首長層に招かれた場合が多かったように本には書かれている。拉致された人もいたかもしれない。渡来人は、朝鮮半島に存在した知識・技術をわが国の人々に伝授したが、多くは、祖国に帰ることはなく、わが国で生涯を終えたのではないかと私は考えている。

**第1章 朝鮮半島と倭との通交の略史****1. 高句麗の興起**

高句麗は、貊族が主体で、紀元前から、鴨緑江の中流域やその支流湍江の流域などを住地としていたが、209年、鴨緑江の中流域北岸の国内城（現在の中国吉林州集安市）に移った。290年、中国西晋の武帝（司馬炎）が死亡すると、政権内部の激しい権力闘争が起こり、西晋王朝の権威と支配力は急速に失われた（五胡十六国時代）。高句麗は、美川王の313年、半島支配の根拠地としていた楽浪郡・帯方郡を攻略し、楽浪郡・帯方郡は高句麗が支配することになった。

317年西晋が滅亡し、319年、鮮卑族の慕容氏が遼東を確保すると、高句麗と慕容氏は直接対峙することになり、しばしば衝突が起こった。前燕の王となった慕容皝は342年、5万の大軍をもって、故国原王の高句麗に大攻勢をかけ、前王の美川王の墓をあばき、王母や妃を捕え、宮殿を焼き払った。

以後、高句麗は北で失ったものを南で取り返すべく朝鮮半島を南下する政策をとり、南に位置する百済と対立・抗争を続け、新羅、加耶諸国ひいては倭国をも争いに巻き込むことになった。

**2. 百済と新羅の建国、百済と倭の連携**

馬韓の伯濟国から興った百済は、近肖古王（346年～375年）の時代に、漢江の南岸に王城（風納土城）を構えた。この王が、実在したことが確認できる最初の百済王である。

辰韓の斯盧国から興った新羅は、奈勿王（356年～402年）の時代に、現在の慶尚北道・慶州を都に定めた。新羅は、377年、高句麗使にともなわれて前秦に朝貢し国際舞台に登場した。新羅は、高句麗に従属する形で勢力を伸ばしていった。

367年百済と倭は使者を相互訪問させ、連携関係を結んだ。369年、百済王は倭に七支刀を贈呈した。

**3. 高句麗と百済との対立抗争**

369年、高句麗の故国原王は、歩騎3万人を率いて雉壤（黄海南道）に駐屯し、住民を略奪した。百済の近肖古王は、太子を派遣し、雉壤を急襲して高句麗軍を撃破し、五千余の首級を得た。

372年、百済の近肖古王は、太子とともに3万の兵を率いて高句麗の平壤城を攻撃し、高句麗の故国原王は流れ矢にあたって戦死した。この2度の百済と高句麗の戦争に、倭は倭王のもとに軍を組織して救援した。

396年、高句麗の広開土王は百済に親征し、百済王都の漢山城を攻略した。百済王は、高句麗に永遠の服従を誓った。

400年、新羅の救援要請にこたえて、広開土王は歩騎5万の兵を送った。高句麗軍が来たため、新羅城（慶州）にいた倭軍は退却し、高句麗軍は倭軍を任那加羅（金官国）まで追撃した。

404年、倭軍（と百済軍）は帯方地方に侵入するも、惨敗、死者無数。

407年、高句麗王、歩騎5万を派遣し、敵（百済あるいは倭）に、大勝した。

413年、広開土王が死去し、長寿王が即位した。

427年、長寿王は、王都を平壤に遷した。平壤は大同江に面し、黄海に近い交通の要衝であった。

#### 4. 渡来人の招来:5世紀倭の技術革新

4世紀半ば、高句麗の南進に抵抗しつつ成長を開始した百済が、伽耶諸国と友好関係を築くと、倭の王権も友好関係にあった加耶南部を介して百済と結びつき、軍隊の派遣など朝鮮半島へ軍事的な介入を行う体制が整備された。ただし、軍事行動を含む王権外交の実務は、大王周辺に集う有力首長層や半島との対外交渉に直接関係した首長が担っていた。有力首長たちは、半島で軍事介入を行いつつ、各自様々に加耶南部と独自のネットワークを築き、最新技術を持った有能な人材を確保していた。

### 第2章 葛城の地域開発

#### 1. 南郷遺跡群:「かつらぎ」の王と渡来工人

1992年から2004年まで御所市南郷で行われた遺跡調査により、5世紀前半に、「かつらぎ」の王が、朝鮮半島から渡来した工人の技術指導を受けながら、東西1.4km、南北1.7km、面積2.4km<sup>2</sup>の南郷地域を開発し、生産を行ったことが明らかになった。

発掘された施設や建物を列挙すると以下ようになる。

A:「かつらぎ」の王が祭儀をおこなった建物。B:王が水の祀りを行った施設。C:王が政治を行った建物

古墳時代の豪族居館か? 面積12600m<sup>2</sup>

- ①高い熱を用いて金属・鹿角・ガラス製品の加工・生産を行っていた特殊工房
- ②約26坪の総柱構造の掘立柱建物が3棟並んでいた。鉄器と製塩土器の大型倉庫
- ③「渡来人の家」とされている大壁建物が建っていた。手工業生産を指導した親方層の居住地
- ④手工業生産をした住民の居住地:7か所の遺跡。竪穴住居38棟、掘立柱建物19棟、大壁建物1棟
- ⑤土器棺墓からなる一般住民の墓地:3か所の遺跡

#### 2. 南郷遺跡群の変容

「かつらぎ」の王が支配した南郷遺跡群は規模を縮小し、忍海地域の脇田遺跡の鍛冶生産が発展する。脇田遺跡からは、朝鮮半島系土器、鉄滓と羽口などが出土した。物流も、紀ノ川・吉野川ルートから大和川ルートに切り替わっていく。5世紀後半以降に葛城地域が大王家の管理下になると、忍海地域の工房群もヤマト王権直営になった。原材料の供給が安定すると、多くの鍛冶工人を専属的に従事させた。彼らは葛城山麓に墓域を得て、故郷の墓制の横穴式石室に葬られ、7世紀代まで造営が継続する。

### 第3章 河内の鉄器生産・武器生産

#### 1. 河内の鉄器生産

大泉遺跡は、生駒山地南端西麓、柏原市平野から大泉にかけて、東西約500m、南北約650mに営まれた、古墳時代で近畿地方最大の鍛冶集落である。大泉では、5世紀には鍛冶生産が始まり、5世紀後半頃に渡来工人を受け入れ、6世紀後半に盛期を迎え、7世紀前半まで続いた。出土した鉄滓の量は約500kg、輪羽口は約1000個にのぼり、精錬鍛冶(製鉄で得られた鉄塊から不純物を取り除き純度を高める工程)から鉄器生産(武器や農工具)までの専門工房である。土師器や須恵器とともに移動式竈や韓式土器なども出土し、鉄器生産は朝鮮半島から渡来した先進技術を持つ集団の指導の下で行われた。

大泉遺跡は、6世紀以降には、朝鮮半島からの鉄素材に加えて、岡山県など中国山地で製鉄(=製錬)が始められていて、そこで生産された鉄塊も運ばれた。

森遺跡は、生駒山地北端西麓にあり、遺跡の範囲は500m四方、鍛冶炉は30基ほど、鉄滓は60kg以上が出土した。5世紀中葉に渡来工人による生産(韓鍛冶)が始まり、6世紀後半には「倭鍛冶」による生産が主流になり7世紀初頭まで続いた。

#### 2. 河内の武器生産

4世紀中頃、日本最初の鉄製甲冑である堅矧板革綴短甲が出現した。朝鮮半島から持ち込まれた斧状・棒状の鉄板を圧延、鍛冶加工し革紐で綴じて製作された。4世紀末頃には方形板革綴短甲・長方板革綴短甲が、5世紀初め頃には三角板革綴短甲が製作された。5世紀第2四半期ごろ、要所を帯状の鉄板(帯金)で固定する帯金式甲冑が考案され、この機会に、渡来の甲冑工人が組織化され金官加耶由来の鋳留技法が導入され、使用部材の規格化と製作工程の簡略化、分業化、量産がすすめられるようになった。

鋳留技法の出現とともに、掛甲が導入される。小札約800枚を革紐や組紐で連結して、威して(綴り合せて)構成する。可動性にすぐれているが、重量があり、本来は騎馬戦用に有効な型式である。

6世紀初めごろ、定型化した短甲は、横矧板鋳留短甲を最後に姿を消し、掛甲が鉄製甲の主体を占めるようになる。甲冑を生産した工房(生産遺跡)の場所は、確認されていない。

### 第4章 須恵器生産の開始

#### 1. 須恵器生産の開始

5世紀前半頃、渡来工人によって、轆轤を使って陶質土器を成形し、構造窯を使って高温で還元焼成する

技術が伝えられ、日本では、須恵器と名付けられた。

須恵器の生産は、西日本各地で開始され、窯跡の分布は福岡県から大阪府まで、あたかも朝鮮半島から畿内への瀬戸内ルートに沿っているようである。陶邑窯跡群(堺市ほか)と朝倉窯跡群(福岡県筑前町)が最も早く生産を開始したと考えられる。次いで、近畿地方では吹田窯跡群(吹田市)、一須賀窯跡群(大阪府河南町)、北九州では隈・西小田窯跡群(福岡県筑紫野市)と居屋敷窯跡(福岡県みやこ町)、四国の三郎池西岸窯跡(高松市)が操業を開始した。陶邑窯跡群と朝倉窯跡群は操業を続けるが、その他は短期間で操業を停止する。朝倉窯跡群も5世紀代に操業を停止する。

## 2. 陶邑窯跡群の須恵器の変遷

### (1) 大庭寺遺跡の梅TG231・232号窯

大庭寺遺跡の2基の窯跡(梅TG231・232号窯)の生産品は、朝鮮半島の陶質土器と形態上の差がほとんどない。大庭寺遺跡では、大甕がまず作られた。大甕は、和歌山市鳴滝遺跡の倉庫から50個以上出土した。各地に倉庫群が作られ、余剰生産物や貢納物を貯蔵するために大甕が導入されたのであろう。

### (2) 大野池 ON231号窯

大野池 ON231号窯跡は、坏生産の起点になる。甗は、大野池 ON231号窯で急増し、樽型甗も生産される。甗の生産は、以降の段階でさらに顕著になる。甗は、次の段階では少なくなる。

### (3) 高蔵寺TK73号窯・TK85号窯

高蔵寺TK73号窯・TK85号窯では、坏が多くなり、甗・樽形甗も多い。半島における甗、樽形甗の出土地域は栄山江流域を中心とした全羅道である。

### (4) 高蔵寺TK216号窯

この窯は、両耳付壺が伴うことが注目される。両耳付壺は、栄山江・錦江流域に分布する。

### (5) 日本化した須恵器の伝播

陶邑窯跡群の流れは、梅TG231・232号窯→大野池 ON231号窯→高蔵寺TK73号窯・TK85号窯と続いた加耶系に対して、高蔵寺TK216号窯からは百済系になったといえよう。最初に渡来した加耶系を主体とした工人集団の中に、後に渡来した多くの百済系(栄山江流域)工人が加わったために変容したと考えられる。5世紀中葉から後半に、ヤマト王権の中核の一角である陶邑に、多くの渡来工人が集まり、新しい技術導入による工人集団の再編成が行われ、いわゆる「須恵器の日本化」が完成したのであろう。日本化した須恵器生産技術

が列島各地に伝わるのはヤマト王権を背景に、各地方に工人の移動や技術の伝播が行われたからであろう。その時期は5世紀末から6世紀初めに設定できると考える。これらの須恵器窯では陶邑様式の須恵器が生産された。

## 第5章 日本列島に伝えられた馬と騎馬文化

### 1. 騎馬文化の導入:河内の馬飼、河内の牧

百済王の良馬献上を皮切りに、百済から馬の飼育技術を持った集団が、馬を準構造船に乗せて、北河内の四条畷市部屋北遺跡の地に移住してきた。朝鮮半島からの馬を受け入れた最初の主要拠点「河内の牧」は、北から南へ寝屋川市・四条畷市から東大阪市まで3km、東西は古墳時代の河内湖の東岸から生駒西麓まで2kmの地域である。古墳時代の部屋北遺跡は、自然地形や区画溝によって、5ヶ所の居住域に区切られており、それぞれの居住域から竪穴住居、掘立柱建物、井戸が多数検出している。部屋北遺跡とその周辺地域は、馬にかかわる遺物が数多くを出土し、「河内の馬飼」が馬の繁殖と飼育を行った場所であった。馬の放牧地は、生駒山系西麓一帯にあった。馬にとって必需品の塩を作る製塩土器も竪穴住居跡から出土した。

### 2. 馬の生産と流通・東国からの馬供給システム

河内の牧は、ヤマト王権の主導の下で、選定され維持されたと考えられる。しかし、人口密度が高く、耕地の集約化が進んでいた畿内では、大規模な馬生産に必要な面積を確保することが難しく、大規模な馬生産は、東国の首長に委託されることになった。

伊那谷(長野県)や上野(群馬県)に馬と馬飼集団を移住させた際には、「古東山道」ルートの拠点として伊那谷が選ばれ、連携させた。この地で育てた馬を近畿まで運び、河内の牧にいったん集めて、そこから必要に応じて馬を運び出すことで、馬の需要の増加に対応したと考えられる。

上野の榛名山東麓の渋川市では、黒井峯遺跡で5世紀後半の家畜小屋とみられる建物跡が見つかり、牧や厩舎や馬飼の集落跡があったと考えられている。また、渋川市白井・吹屋遺跡群では、無数の馬の蹄が発見されたことから放牧地があったと考えられている。これらの遺跡は、6世紀の榛名山の2回の噴火で埋没した遺跡だから、古墳時代中期にはこの地域一帯に馬の生産が行われていたとみてよいと思われる。以上

## ゼミ会場と時間 13:15～16:50

### 1. 全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)

## 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分

### 私の『風土記』観

—齊藤 潔会員記—

#### <『風土記』について>

- 1、『風土記』は713年の官命で、郡郷名の由来、産物、地味、古老伝承を諸国から報告した地誌で、天平年間(729～49年)までには編纂されたとみられる。
- 2、現存する『風土記』は律令制下の5ヶ国の風土記と他書に引用されている諸国の逸文を編集したものである。
- 3、私が読んだ『風土記』は、岩波文庫・武田祐吉編です。

#### <私の『風土記』観>

- 1、『風土記』の文面で目立つのは、こじつけの様な郡郷名の由来記事や『記紀』丸写しが見られ、文化的描写が感じられない記事もある。一方、地元の有力者や古老の伝承記事は生き生きと表現され、千年以上経過しても興味は尽きない。『風土記』の文面は、無味乾燥な記事と生命力のある物語とが同居している。
- 2、『風土記』には、官命で諸国の産物や地味を記す様規定している。しかし、その割に、諸国の物産や地味の記事が少ない。私の想像した理由はこうだ。諸国の地味や産物の詳細情報は、郡司(律令制下でも真の支配者)が掌握している。これを正直に報告すれば、諸国の経済力が判明する。又、故事来歴を語れば、誰がその地の実力者が判明する。『風土記』の目的は、諸国の経済力と政治・経済の真の支配者のあぶり出しにある。
- 3、諸国の真の実力者である郡司は、『風土記』の目的を見抜いていたと思う。それが、諸国風土記の記載文面に如実に表現されている。郡司は、その地の伝承記事は隠していない。自分が古来の実力者の子孫である事を隠す必要はないからだ。『風土記』記載の作り話と実話の混在は郡司の思惑による。中央から派遣された国司は、諸国の納税品(租・庸・調)や市場の交換品の実態把握や軍団制(徴兵制)の維持も郡司に依存していた。
- 4、『風土記』というと、NHKの映像番組「新日本紀行」・「新日本風土記」や各地の「郷土史・誌」の語感にあるように文化的郷愁を誘う。しかし、律令期の『風土記』の内容は、純文化的ではない。地元情報を掌握している郡司がその意図を見抜いて、地方伝承以外は意図的に無味乾燥な文面にしたのだ。つまり、国司がその内容に不満であれば、郡司と相談・依頼の上で、『記紀』の関連文等を挿入し、体裁を整えて編集したと思う。
- 5、『風土記』の編纂には、藤原不比等(659～720)とその一族が深く関与している。不比等は、持統天皇の信

任を得て、文武・元明・元正の時代に政治的実権を手にした。当時の藤原氏は、二流の貴族であり名門貴族である葛城・大伴・物部・蘇我のような大王との血縁や政治・経済基盤がなく、持統以下の天皇が頼りだった。彼は、蘇我氏の娘や天武の元夫人と結婚して、4人の男子は公卿に、2人の女子を文武・聖武に嫁がせ外戚となり一流貴族となった。課題は経済力だった。そこで律令制の徴税品市場に目を付けたのだ。当時の徴税品(租・庸・調)から、庸(麻布)と調(特産物)の市場支配を狙った。平城京には東西に夫々市がある。この市は、役人向けで午後から開市される。役人の給与は現物支給(庸・調)なので、彼らはこれを東西市で必要な食料や日用品と交換する。不比等とこの4兄弟はこの市場権を支配し、畿内の通商を掌握しようとした。しかし、畿内には地元の有力者支配下の既存市場(交差点・辻にあり終日開催)があり、東西市もそれに依存していた。経済活動(売買・交換・運送・倉庫・市場)は、政治・祭祀ルートとは異なり、地縁・血縁といった地域密着や経済合理性が決め手だ。不比等らの政治的介入は失敗したと思われる。

6、諸国の経済と郡司に移ろう。郡司は、徴税品の租(稲)を郡単位で管轄する正倉に備蓄した。庸(麻布)や調(特産物)は、畿内政府の財源となるがこれも郡司が郡単位で集荷して都まで運搬した。又、諸国の市も郡司の支配下にあった。一方、畿内政府の軍事力は、軍団制(徴兵制・792年廃止)で諸国の公民が兵役を負ったが、兵士の武器調達と軍事訓練は郡司とその子弟が担当していたのだ。律令制と言っても、経済・軍事の実態は、前身が国造である郡司に実権があった。即ち畿内政府の課題は、諸国の経済・流通・軍事の実権を、郡司から奪取する事だった。畿内政府は郡司一族の男子は兵衛、女子は采女を供出させると共に、郡司の任命権を世襲から外して国司の権限に移行させる人事権を強化していった。国司が郡司に代わって、事実上の徴税・裁判権を掌握するには、2世紀の期間を費やす事になる(9C末・受領制の成立)。

7、則ち、この時期の祭祀・政治・経済の主導権は郡司らにあったのだ。これを念頭に、『風土記』の諸国の地勢、地味、風俗、風習、産物、故事来歴等の記事を、読むことが大事と思う。了。

### 次回3月2日ゼミ・テーマ

縄文・弥生時代の問題点①—飯田 真理会員